

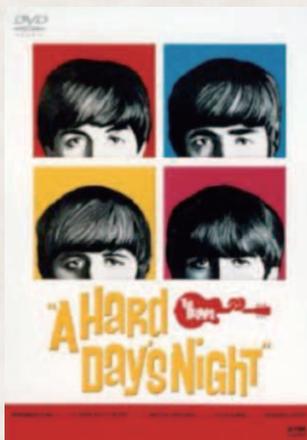
走ることは生きることである

法学部 教授 武藤浩史 むとうひろし

……といっても、マラソンの話でも、ジョギングの話でも、ウサイン・ボルトの話でもない。あのビートルズの走りのことだ。最近、ビートルズ論（『ビートルズは音楽を超える』平凡社新書）を上梓したが、音楽については素人愛好者程度の私がビートルズを語り得たのは、彼らの魅力がその音楽と繋がりがつても音楽を超えていて、英国文化論や言語論に加えて、身体論の対象にもなり得るからである。

彼らのコンサートツアーの狂騒を模した疑似ドキュメンタリー映画『ハード・デイズ・ナイト』をぜひご覧いただきたい。冒頭（0秒から2分30秒）、中盤（37分10秒から39分25秒）、終盤（71分35秒から73分40秒）と3つの走りどころがあつて、ジョンが、ポールが、ジョージが、リンゴが、走る、走る、走る、走る。映画の幕が開くと、ジョンとジョージとリンゴが画面の奥から走つてきて、ジョンとジョージが並んで先頭を、その後をリンゴが走る。すぐに、ジョージが転び、その影響でリンゴも転び、ジョンは転んだ2人を振り返りながら、楽しそうに笑つて走り続ける。ジョージもすぐに立ち上がつて、楽しそうに笑いながら、また走る。リンゴも立ち上がつて走る。中盤では、4人が草地で思いきり自由に走り出す。最後の方には、失踪したリンゴを探して警察署に行つたジョンとポールとジョージが走り出し、それにつられて警官たちも走り出し、ここになぜかリンゴも現れて一緒に走りはじめ、皆で走りまわるという行為の中で人間関係の対立が溶解して、ただただ走る喜びを伝えることで、走る事が人生の比喩にまで高められた名場面がある。走ることは生きることである、というように走る。相互にコミュニケーションを取りながら各自が自発的に動いてどんどん前に進んでゆく。ブラジルのサッカーのように。モーツァルトのオペラのように。

このように生きてゆきたい。働くことは生きることである、というように働きたい。遊ぶことは生きることである、というように遊んでゆきたい。



『ハード・デイズ・ナイト』
配給 : UA
制作年 : 1964年
DVD発売元: 松竹

談話室

教員によるエッセイコーナー